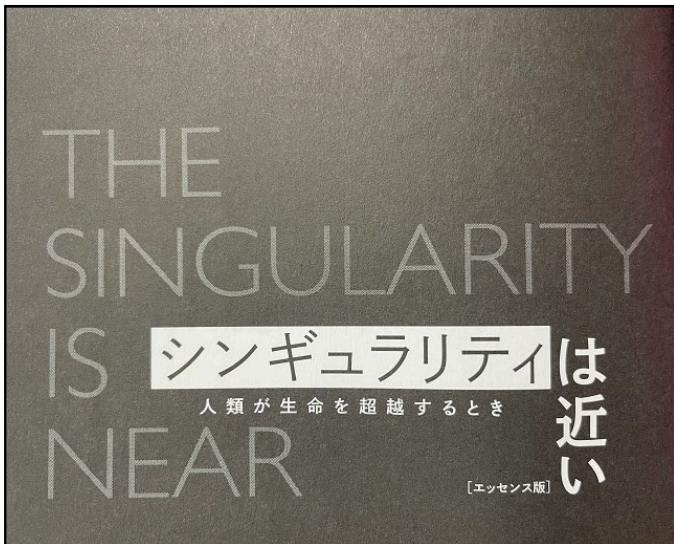


平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 4月号をお送り致しました。
何卒、よろしく願い致します。



小豆島で日が暮れてしばらくして、ベランダに出てみると、まだ中天近くにオリオンの三ツ星が四隅に輝く星に囲まれて揺れている。いよいよ深夜になるとかなり西に動いている。どちらが動いているのか、どちらも動いているのかそれは知らない。知っている事も、知っているつもりになっているだけの事もあるが、世の中知らないことだらけである。いつもガソリンを入れているスタンドは、210円/Lだった。つい先々週は同165円程度だったと思う。但し、ここを書いているのは3/19日だ。ガソリン代が下がっても運送費は下がらないなあと思っていたけど、今度は上がるのかな。2008年の高騰時にはヤマト運輸も佐川急便も値上げはしなくて、一時的だったことを知っているのかなと思っていた。では、この現価格は一時的なのかどうなのか。4月の米中首脳会談は5月に延期になったとか。今年は3度互いに行き来して、首脳会談をするとか。ただ、そこまで米国の諸事情が今の通り保てるのかどうなのか分からない。浮上する日本、沈みゆく米国とかいうけれど、米国が沈んで日本は浮上できるのかどうかは定かではない。

最近の様相は、表に出やすく見えやすい。民主政権のように裏でコチョコチョというのも、誰かが分かり易く解説してくれるので、結局は分かるのだが、単刀直入に物理的な力技で、お前のものだけ俺のものにするよ、と言われれば力で勝てないなら文句を言っても始まらない。そういう風にこの世はなっている。むかし家の前を通る全共闘のデモをチラと見た父親がひと言、『革命を起こしたいなら、鉄砲を持て』。実に分かり易い。ところが、この世の本質はそう簡単ではなく、力だけで治まるところではない。それは短期的な話で長期的には入れ替わりを繰り返し、知恵の世界へと導かれて行く。

2026年のWBCはベネズエラが日本に勝ち、イタリアに勝ち、最後にアメリカに勝って、優勝した。泣いている選手も多かった。確かに強かった。けど何を以って強いというのか。野球は投げて打って守って走だけの競技では既になくなっていく。日本の代表井端監督は、1年以上前からドジャースのアイアトン氏をチームに招聘の誘いを掛けていたという。氏が情報に長けているからだ。今の野球は情報戦の域に達している。それは投手だけを分析するのではなく、捕手の配球も分析する。もちろん打者も分析する。その分析結果から戦略を練る。此処までが情報、英語ではintelligenceと表現されている。此処まで来ると、日本には『裏をかく』という言葉がある。日本対ベネズエラ戦はライブで観ていた。勝負を決定づけた2本の本塁打も観ていた。ベネズエラの打者が打席で何を考えているのかは画面上からも伝わって来た。つまり捕手の若月選手の配球パターンの情報を得ていて、ひたすらそれを狙って待っている様子が見て取れた。情報とは、取得して戦略化する事も大事だが、同時に相手も同様だという事を忘れてはいけない。分析されているという事。2本のどちらの打者も、『待ちました』とばかりの、見惚れてしまうほどのホームランシングだった。

泣いていた選手と観客は、何故泣いていたのかは想像できない。自国を攻められて、米国の暫定政権が出来ているらしい。イランに次ぐ埋蔵量の石油と天然ガスが僅か三千万人の人口の国にあるらしい。まるでジャイアンのようなのだ。でも、日本国の様な自国に対する感覚では無いような気がする。面白くないのは事実だろうけれど、それが中国か米国かというだけの違いで、でなければわざわざ米国のマイアミで応援しないだろう。選手が働いているのは米国資本である。そう思うと我が国民の心情は疑いたくなるほど、単純に思える。

事態はもっと深刻だが、確かに単純でもある。ついでにイランの埋蔵されている原油と天然ガスも欲しいと思っていたら、不倶戴天の敵と思っているネタニヤフから誘いを受けて、それで攻め込んだ。ネタニヤフはそんなものはどうでも良くて、喉元に刺さっているミサイル基地を抜きたいだけだから、そもそも狙いが違う共同戦線になっていて、だから日米首脳会談の後、和解に方向転換した。高市早苗が何を言ったか知らないが、日本船は通すと言っているのに米国船を通さないとやっているから、気を使って日本船は通らないだけで、和解に向けて米国船も通し始めたなら、もう日本船も通るだろう。面白くないネタニヤフは、そんな方向性は無視して爆撃を続ける。見事なイランの戦略である。狙いの違う戦線のすれ違いを突いて、共同性を破壊する情報戦の結果だと思える。そうすると、何もこの世は物理力勝負の前に、実は情報がものを言うようになってくる気もする。だから、『ひとは必ず正しい方向に流れる』と言っているのだが、保証はしない。そうならなければ世界は滅びるだけだから。

その前にいろいろと思う思わないとにかかわらず、付き合わなければならぬ流れというものがある。これらも含めてすべてが手順として組み込まれているように思う。米軍が我が国から撤退すれば、NATO に加盟するしかないが、核の無いまま加盟して意味があるのかどうか分からない。NATO から欧州は抜けるかも知れない。米中が世界を二分して支配するのに、中国はユーラシア、という事になるが、そもそもユーラシアはヨーロッパとアジアを合わせた言葉で本来の概念ではない。

その様に考えると、確かにヨーロッパとアフリカをひとつの文化圏、経済圏として行く先でヨーロッパとアフリカを分ければ良い。アジアはロシアからオーストラリアまでをひとつのエリアと捉えれば良く、そういう意味でロシアとチャイナ・イランは仲良しで分かり易い。そうなると、イスラエルは？という事になるが、そもそもアラビア半島はアジアなのかという事になる。小学校では西アジアと教えられたけど、少し違和感がある。むしろアフリカのイメージがある。肌の色、鼻の形で物事を考えすぎで、ジッと世界地図を眺めれば、砂漠は横たわり、紅海があるだけで大陸としては明らかにアフリカだ。

そういう意味では、アジアの逸れものの日本と似ている。アフリカ、ヨーロッパ、西アジア、何処から見てもイスラエルは逸れものだ。その日本は南北米大陸のエリアの国にくっついている点も米国の親分面しているイスラエルと子分面している日本は同じといえば同じ雰囲気。日本は一種独特で、イスラエルのように不倶戴天の敵などいない。妬みや嫉みは周りから受けてもそれは敵ではない。再び世界地図を持ち出せば、日本は辺境の国でも、遥か東方の国でもなく、世界の中心にいるのかも知れない。自分で中心と思うとややこしくなるので、他から中心と思われるようにしてれば、やがて中心として模範されるようになるだろう。だから、言ってみればそんな事は当の本人からすればどうでも良い事で、ひとが勝手にそう思いそうするだけの事と想像できる。

よく、キャスティングボードを握ると選挙の時に言われるが、世界を二分する米中の米国は、攻めたベネズエラに野球で負けるほど弱体化して来ているので、中国と対等に対峙するには日本の力が要ると言っている。もちろん消去法でそうなるだけのことだが、『待てば海路の日和あり』幼い頃父親から教えられた言葉だが、正喜撰で目が覚めたが、特にVISIONを持ってなかったので、進むだけ進んで自滅して、属国になりながら地に足付けた力を蓄えて、もう一度世界に出る機会が訪れて来た。さてさて、面白くなって来た 2026 年。どこまで見届けられるか分からないが、みんなで楽しみにしておきましょう。

有限会社アルファー 吉田清一郎